

# 金井雅之ゼミ卒業論文講評

## 現代社会の計量的研究を中心とするゼミナール

担当 金井雅之

金井ゼミは、現代社会の諸問題の計量的実証研究を目指して2010年4月に発足した。今年度提出された3本の卒業論文は、その第1期生によるものである。

金井ゼミでは、社会的事象の因果連関にかんする理論仮説を、大規模社会調査データの統計的二次分析によって検証する、という計量的実証研究を目指している。先行研究を踏まえて適切な問いと仮説を立て、多変量解析を初めとするさまざまな統計的手法を用いて無作為抽出による信頼性の高いデータを分析し、得られた知見に理論的・実践的解釈を加えるという作業は、言うまでもなく高度な知識と強靱な思考力を必要とする知的活動である。高等教育の集大成ともいえるこの要求水準に、今年度の学生たちはよく応えてくれた。

なお、金井ゼミでは3年次の終わりに「習作論文」という論文を作成してもらうことにしている。これは、仮説検証型の論文の型を守りつつ、分量は一般の学術誌に掲載される論文程度に抑えたものである。仮説検証型論文の執筆には総合的な知識と経験が要求されるため、一度このような論文を書いてみることによって、卒業論文を執筆する準備と心構えができることが期待される。実際、今年度卒業する3人の卒業論文のテーマは、いずれも習作論文を発展させたものである。

**金田一輝**「地域社会の連帯が犯罪不安に及ぼす影響について」は、地域コミュニティにおける人間関係の希薄化が犯罪の増加を招いているのではないかと、という世論調査に見られる人びとの主観的認識は正しいだろうか、という疑問から出発する。さまざまな実証的先行研究の成果を踏まえて、地域連帯の希薄化から犯罪不安にいたる因果連関の過程に、地域防犯活動やそれへの個人の参加といった媒介項をおき、それ

ぞれの段階でどのような因果効果が検出されるかを、2つの大規模社会調査データを用いて回帰分析によって検討している。その結果、先行研究で指摘されていたのは関連の向きが逆転するパスがいくつか存在することを新たに発見し、なぜそのような結果になるのかを、人びとの認知プロセスにかんする社会心理学的な知見も踏まえて考察している。全体の因果構造が複雑になりすぎてやや焦点がぼやけてしまったのが惜しまれるが、理論とデータの往復という仮説検証型実証研究の王道を行く力作であり、本年度の代表論文にも選出された。

**渥美恵梨**「外国人に対する排除意識形成要因とメディア接触の影響」は、外国人に対する排除意識の形成要因として、メディアからの報道の影響がどの程度の効果をもつかを、やはり大規模社会調査データの二次分析によって検討したものである。データ中の測定項目の制約により、先行研究で挙げられているさまざまな要因を統制したときのメディアの影響は検出できなかったが、単純な相関関係は予想どおり見られた。そこで、メディアと交互作用する要因を探した結果、年齢と新聞を読む頻度の交互作用が有意であることを新たに発見したのがこの論文のオリジナリティである。この交互作用の意味についての著者の解釈には若干議論の余地が残るが、新たな知見を見つけそれを解釈するという作業を達成したことは評価できる。

**新垣愛実**「所得水準と学歴の再生産」は、教育を介した階層再生産過程において、親と同じ職業につきたかったかどうか教育達成に対するアスピレーションの差を生むのではないかと、という仮説を立て、大規模社会調査データで検証を試みたものである。荻谷剛彦や吉川徹らの先行研究で指摘されていた意欲の差という問題を、職業志望という具体的なものに結びつけて考え

ようとした着想が、評価に値する。検証の結果、やはり基本的にはデータ（サンプルサイズ）の制約により仮説どおりの結果は得られなかったが、「親と同じ職業につきたい」というときの親の職業自体が出身階層の代表的な指標であることを考えると、吉川らの学歴＝階層再生産論を発展させる新たな着想として、今後の展開が期待されるかもしれない。

このように、3人の卒業論文はいずれも、ささやかではあるが新たな発見をしたという点で学問の発展に貢献したばかりでなく、得られた知見の解釈という困難な作業を通じて総合的な思考力を身につけるよい経験になったのではないかと思われる。これからの人生において、高等教育を修了した人材としてふさわしい活躍を期待したい。